

博物館40年のあゆみ

ここでは、郷土博物館の設立から現在に至るまでの歴史を振り返ります。

設立の目的「急激に変わる郷土の姿を記録し、貴重な郷土資料を保存する」

戦後の急速な人口の増加により、伝統的な生活文化の滅失、歴史資料の散逸などが危ぶまれました。そのため、郷土資料の収集や展示、文化財調査などを行う中心的な施設の実設の必要性が高まりました。

昭和47年（1972）、「郷土資料館建設」が区の長期基本計画に掲げられ、建設計画がスタートします。昭和57年（1982）、大谷田上土地区画整理組合からの「郷土資料館建設要望書」を受け、2年後には「郷土資料館開設準備係」が発足。同時に、「水と緑を生かした自然のあるまちづくり」を意識して、野趣あふれる日本庭園（現在の東洲江庭園）の併設も計画されました。



▲開館を知らせる「あだち広報」

文化遺産調査開始

「美と知性の宝庫 足立」

平成24年（2012）、区制80周年を契機に本格化した文化遺産調査では、旧家が所蔵する美術資料の調査が進み、絵師・書家・俳諧師などの足跡と、地域に広がる芸術活動が明らかになりました。特に美術資料は、日本美術史研究の大家から「美と



▲調査の成果を展示会で披露 ▲『国華』1531号

知性の宝庫」と称されるほどの豊かさであることがわかり、現在も刊行されている世界最古の美術研究誌『国華（こっか）』で「特輯（とくしゅう） 千住・足立の文化遺産」が組まれる荣誉に浴しました。

開館以来の大規模リニューアル

「郷土資料館から『美術博物館』へ」

開館から30年を超え、空調設備の老朽化が目立つようになりました。これまでの文化遺産調査の成果により美術資料の収蔵が増える中、貴重な資料を適切に保管・展示ができる設備の充実が求められました。

また、単に資料の保管や顕彰をする場所ではなく、博物館法に基づく登録博物館（※）となるべく、郷土資料館ではなく「郷土博物館」という名称にこだわりました。



▲博物館開館と開館記念展を知らせるチラシ

（※）登録博物館とは：博物館法が定める人員配置や資料保管基準を満たした博物館。法律上の地位、信用度の向上が期待できる。

待望のオープン

生涯学習の拠点として活躍

昭和61年（1986）11月3日に開館すると、展示会の開催はもちろん、区民向け教養講座や郷土芸能鑑賞会の開催、小中学校の団体見学の受入や学芸員実習の実施など、現在の博物館活動の礎が築かれました。

区内外の幅広い世代の学習拠点として、小中学生の団体見学は毎年4千人を超え、現在までに15万人以上の児童生徒が来館し、総来館者数は80万人を超えました。

そこで、「郷土資料館から『美術博物館』へ」を改修コンセプトに掲げ、2年4カ月にわたる大規模改修工事が始まりました。

温湿度管理の徹底、有害物質をシャットアウトする展示ケースの導入など、大幅な機能向上を遂げ、晴れて令和7年（2025）、4月26日、リニューアルオープンを迎えました。



▲ホールは美術展示スペースに



▲気密性の高いエアタイトケース

未来へつなぐ 次の10年、そしてその先へ

40年前、博物館は「調査・研究・保存・普及の4つの機能を備え、未来へ開かれることを目指すもの」として開館しました。

地道な調査や研究、資料の整理や保存といった活動は、魅力ある普及活動の根幹です。そして、その専門的な仕事は博物館でしかできないものでもありません。美術資料もまた、足立を語る郷土資料です。これまで

風土記編さん

博物館活動の基盤となる成果

昭和63年（1988）、「足立風土記」編さん事業が始まりました。「絵で見る年表足立風土記」、「足立風土記調査報告書」のシリーズ、「足立風土記読稿 地区編」、「ブックレット足立風土記」と、16年の長きにわたって数々の刊行物を刊行し、事業が完了しました。

風土記編さんの調査で得ることのできた情報と資料は、今の博物館活動の基盤ともなっています。

常設展示のリニューアル 江戸・東京の東郊

平成21年（2009）、開館20年を経て、常設展示の改修を行いました。長年の調査研究の成果をもとにメインテーマを「江戸・東京の東郊」に絞り、子ども向けにホールの体験ブースや吹き出し型解説、明るい照明などを取り入れました。

触れる道具や遊びながら学べるコーナーは、現在の常設展でもその一部が再活用されています。

▼現在の常設展に使える体験型展示「にぎやかラック」



▲平成21年（2009）リニューアルで生まれたこどもホール

「博物館のあゆみ」

でお披露目した資料も、さらに詳しく研究し、未知なる足立の文化力と歴史を解き明かしていきます。

開館50周年、そしてその先の未来に向けて、足立区立郷土博物館は、「ひろく区民の文化創造に役立つための施設」として、足立の歴史を後世につないでいきます。



▲開館を祝して区画整理組合から寄贈された「郷愛」の像 代々この土地を受け継ぎ耕してきた人々が未来を見つめている。

- 昭和47年（1972）「長期基本計画」に登場
- 昭和59年（1984）郷土資料館（仮称）開設準備室
- 昭和61年（1986）11月3日足立区立郷土博物館開館
- 平成2年（1990）展示解説ボランティア制度開始
- 平成5年（1993）伊興遺跡公園開園
- 平成15年（2003）風土記編さん事業完了
- 平成21年（2009）常設展示リニューアル
- 平成23年（2011）「千住の琳派」展 文化遺産調査開始
- 平成24年（2012）区制80周年「あだちの仏像」展
- 令和4年（2022）区制90周年「琳派の花園」展 大規模施設改修による休館
- 令和7年（2025）リニューアルオープン
- 令和8年（2026）開館40年

足立の魅力を国内外に発信 令和7年度事業報告

リニューアルオープンを迎えた令和7年度、江戸の文化と千住の歴史が、国内外で輝きを放ちました。当館の浮世絵コレクションが、他館の展示で注目を集め、開館400年を迎えた千住宿の魅力は、特別展や雑誌の特集を通して多くの方々に伝えられました。

当館浮世絵コレクション 有名美術館で高い評価

長野県小布施町の北斎館では、当館所蔵作品234点を展示する企画展「知られざる秀逸コレクション 東京・足立区立郷土博物館所蔵浮世絵名品展（5月24日～10月5日）」が開催され、初期浮世絵から近代の新版画まで幅広い作品が4期にわたって公開されました。

この展覧会は、企画内容の質の高さとコレクションの価値が評価され、一般社団法人日本アート評価保存協会の「第十三回秀逸企画賞」を受賞しました。



▲北斎館 企画展ポスター

続いては、21点の浮世絵が海を渡り、台湾国立故宮博物院南部院区で開催の「江戸浮世の美（5月30日～8月31日）」に展示され、歌川広重「両国納涼大花火」等が海外にも江戸文化の魅力を発信しました。



▲展覧会テープカットの様子



▲「両国納涼大花火」フォトスポット

千住宿開館400年記念 特別展を開催

特別展「千住宿四〇〇年」では、千住宿の繁栄を「歴史の継承、交通の要衝、文化の繁栄」という3つの視点でまとめ、約70点の資料を展示しました。

千住の地名由来とされる「千手観音立像御前立」をはじめ、地域に伝わる貴重資料が来館者の関心を集めました。また、区指定有形民俗文化財、氷川神社（千住四丁目）

の山車は、12年ぶりに組み上げ展示が行われ、高さ約7.5メートルの迫力ある姿が来館者を魅了しました。



▲千手観音立像御前立（勝専寺蔵）



▲氷川神社（千住四丁目）山車展示の様子

千住の魅力伝える雑誌特集

千住宿開館400年は、国内の様々なメディアで注目され、都心の料理店やホテルなどに配架される文化雑誌『月刊江戸楽9月号』や、新幹線のグリーン車に配架される旅行雑誌『ひととき11月号』に特集記事が掲載されたことで、全国の読者にも足立の魅力が伝えられました。



▲江戸楽・ひととき



▲江戸楽・ひとときのご紹介
足立区観光交流協会 HP